



あさくら れい
朝倉 玲

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
星空	奇跡	金の石	泉	蛇	白い顔	怪物	獣	魔の森	決心	フルート	プロローグ	
33	30	27	23	21	18	13	11	8	6	2	1	

もくじ

プロローグ

魔の森の主は人間を憎む。

許しなく森に足を踏み入れた者は、

魔法にとらわれて気が狂い、獣に八つ裂きにされ、

闇の怪物に骨の髄までしゃぶり尽くされる。

けれども、森の怪物たちに討ち勝って、泉のほとりから魔法の金の石を得たものは、

金の石の勇者と呼ばれるだろう。

金の石は癒しの石。

どんな怪我でも病気でも、たちどころに治す魔法の力を持つ。

魔の森に関する言い伝え

1 フルード

昔々、私たちが住むのとは別の世界にある、ロムドという国の田舎町に、心の優しい少年が住んでいました。

少年の名前はフルード。

この物語は、そこから始まります……

「よう、お嬢ちゃん。家にお帰りかい？」

フルードが学校を出ると、あざ笑うような声が話しかけてきました。ちよつとしゃがれた少年の声です。フルードは迷惑そうに眉をひそめると、いやいやそちらを振り返りました。道路に面した小さな空き地に、フルードより体の大きな少年たちが五、六人たむろしています。ガキ大将のジャックとその子分たちです。

ジャックがフルードを見て、しゃがれ声で笑いました。

「相変わらず女みたいな生つちるい顔してやがんな。男のしるしはちゃんと股についてんのかよ。スカートはいて学校に来たほうがいいんじゃないねえのか？」

少年たちがどつと笑いました。口々に「お嬢ちゃん」「女、女」とはやし立てます。フルードは、ますます迷惑そうな顔になりました。

けれども、少年たちが言っていることは、あながち間違いでもありませんでした。フルードは確かに綺麗な子どもだったのです。少し癖のある金髪に色白の肌、まつげの長い大きな瞳。顔立ちはとても優しげで、本当に少女のように見えます。性格も見た目に劣らず穏やかだったので、腕白な少年たちからは「女の腐ったようなヤツ」と言われて、

しょつちゆうからかわれていたのです。

フルードが何も言わずに立ち去ろうとすると、ジャックがまたあざ笑いました。

「そーらな。おまえはいつもそうやって逃げ出すんだ。ホントに根性のないヤツだぜ」

ジャックの子分たちが、またいつせいに笑いました。その中でもひとときわ甲高く叫ぶ子がいました。背の高い少年たちの中で、ひとりだけとても小柄な子です。

「フルード、おまえなんて逆立ちしたって勇者になれるもんか！ 怪物の声を一声聞いただけで、ぶるって家に泣いて逃げ帰るに決まってるあ！」

それを聞いて、フルードは思わず立ち止まりました。気になることは聞いたからです。

「勇者……怪物？」

なぜ急にそんなことばが出てきたんだろう、と振り返ると、たんにジャックの怒声が飛びました。

「チム、余計なことは言うな！」

小柄なチムは首をすくめると、そのまま黙り込みました。

フルードは改めて少年たちを眺めました。どの子もそっぽを向いたり、逆にフルードをにらみ返したりします。何かを隠しているような雰囲気です。

ところが、フルードが何か言うより先に、よく通る少女の音が響き渡りました。

「ちよつと、あんたたち！ 何やってんのよ！」

フルードには声だけでそれが誰なのか分かりました。二学年上のリサです。元気のよい女の子で、フルードとは反対に「間違っって女に生まれてきたヤツ」と言われています。

リサは三つ編みにした頭をそらし、両手を腰に当てて腕白たちをねめつけると、ふんつ、と鼻を鳴らしました。

「またフルートをいじめてるのね。いい加減かげんにしなさいよ！ ジャック、あんた今日学校を休んだはずでしょ。やっぱりする休みだったのね！」

「へっ、うるさいヤツが来たぜ」

ジャックは肩をすくめると、子分たちを引き連れて空き地から出て行こうとしました。

「おい、フルート、正義の味方が来てくれてよかったな。女みたいなおまえは、女に守られているのがびったりだぜ」

少年たちがまた笑います。すると、リサがその行く手に立ちふさがりました。

「あたしは別にフルートを守りに来たわけじゃないわ。あたしが用があるのはチムよ」

それを聞いて、小柄な少年が顔をしかめました。

「用ってなんだよ、姉ちゃん……」

チムはリサの弟です。

「チム、あんた父さんの一番いいナイフを持ち出したでしょ。朝、父さんがかんかんだったわよ。あんたも学校を勝手に休んでるし。いったい何をするつもりでいるのよ？」

リサの最後の質問は、チムではなく、親分のジャックに向けられていました。ジャックはまた肩をすくめると、すまして答えました。

「別に。おまえには関係ねえことさ。行くぞ、みんな」

少年たちは足早にその場から立ち去ろうとしました。何かを隠しているような、白々とした雰囲気はまだ漂っています。

その様子に、フルートは、はっとして声を上げました。

「もしかして……魔の森に行くつもりなの!？」

とたんに、少年たちは、ぎょっとした顔でいつせいに振り向きまし

た。大当たりだったようです。

「魔の森……」

リサが真っ青になりました。

「ちよっと、馬鹿なことはやめなさいよ！ 死ぬ気なの、あんたたち!？」

リサの言うことは決して大げさではありませんでした。町の西にある魔の森は、怪物や猛獣がうようよしている恐ろしい場所なのです。

ジャックが顔をしかめながらフルートをにらみつけました。

「相変わらず頭だけはいいいヤツだぜ。ああ、その通り。俺たちは明日、学校が終わってから魔の森に行くつもりなのさ。森の真ん中の泉までたどり着いて、勇者の証あかしに、魔法の金の石を手に入れてやるんだ」

それは、このシルの町に古くから伝わる伝説でした。森の中心には泉があつて、そのほとりから魔法の金の石を持ち帰ったものは真の勇者と呼ばれる、というのです。

「なんて馬鹿なこと……。すごく強そうな戦士や剣士が何人も伝説を信じて森に行ったけど、誰ひとり金の石なんて持ってこれなかったじゃないの！ 本物の戦士たちにできないことが、あんたたちみたいな子どもにできるわけじゃないじゃない!」

リサはヒステリックにそう言うと、弟に向かって命令しました。

「チム、家に帰るのよ!」

「いやだ！ 俺は絶対に金の石を取ってきて勇者と呼ばれるんだ！ 姉ちゃんこそ家に帰れ!」

とチムが負けずに言い返します。言い争う二人の間に、ジャックが割って入りました。

「リサ、チムはおまえの言うことを聞くのにうんざりしてるんだぜ。

チムは男になりたがってるんだ。いいかげん弟を自由にやらせよ

ふん、とりサは頭をそらしました。

「ええ、そうね。これがあんたたちのグループじゃなかったら、チム、偉いわね、って言ったと思うわ。でも、ジャック、あんたやあんたの仲間たちが一緒じゃ、とてもじゃないけど安心なんてしてられないわよ。おまけに、魔の森だなんて……！ 絶対に行かせるもんですか。父さんたちに知らせて、あんたたちをぎゅちり叱ってもらうんだから」「なんだとお!？」

ジャックの顔に、かっと血が上りました。右手が拳の形に握られま

す。すると、フルートが突然言いました。

「やめた方がいいよ、ジャック。森の主の怒りをかうよ」

静かですが、よく通る声です。ジャックや仲間たちは、思わずはつとフルートに注目しました。

フルートは、まるで何かの物語をそらんじるように言い続けました。「魔の森の主は人間を憎む。許しなく森に足を踏み入れた者は、魔法にとらわれて気が狂い、獣に八つ裂きにされ、闇の怪物に骨の髄までしゃぶり尽くされる……」

それは、シルの町に生まれ育った者なら、誰もが物心つく前から聞かされてきた言い伝えでした。魔の森は恐ろしく、いたずらに人間が足を踏み入れてはならない場所なのです。心の奥底に植え付けられた恐怖がよみがえってきて、少年たちの顔から血の気が引いていきま

した。けれども、ジャックだけは拳を握りしめたまま、フルートの前に立ちただけでした。

「意気地なしのくせに俺たちに口出しするんじゃないよ。おまえはとつとと家に帰って、ママにおむつでも取り替えてもらってろ」

ひどい悪口です。でも、フルートは無視して言い続けました。

「やめなよ、ジャック。本当に殺されるよ。みんなが死んだら、みんな

のお父さんやお母さんたちが泣いて悲しむよ……」

「黙れと言ったはずだぞ!！」

ジャックはそう言うのと、いきなり殴りかかってきました。拳がフルートの腹にめり込みます。フルートの小柄な体は吹っ飛び、後ろに立っていたリサにぶつかって、一緒に地面に倒れました。

それを見てジャックが高笑いしました。

「いいまだな! ママの代わりにリサに抱っこしてもらったのか! ついでに、おっぱいもしゃぶらせてもらったらどうだ?」

とたんに、リサが顔を真っ赤にして跳ね起きました。

「なによ、最低ね! フルート、あんたもあんたよ。男なら、もっと少しっかりしなさい! ホントに情けないんだから!」

けれども、フルートは返事をするどころではありませんでした。腹を押さえたまま、地面に突っ伏してうめいています。胃をまともに殴られたので、今にも吐きそうでした。

「もう知らない! 勝手に殴られてなさいよ!」

リサはかんかん怒って立ち去っていきました。

「おやおや、お守りが行っちゃったぜ、フルート。お望み通り、もっと一発殴ってやるうか?」

ジャックがまた笑いました。その目が剣呑な光を帯びています。

けれども、そこへ学校からジャックの子分の少年が出てきました。ジャックは拳に握った手を開くと、子分に言いました。

「遅いぞ、ペック。ずいぶんかかったじゃねえか」

「悪い。先生に残されてさ」

ペックと呼ばれた少年が答えます。ジャックと仲間の少年たちは、ぞろぞろと空き地を出ると、話しながらどこかへ歩いていってしまいました。

後に残されたフルートは、その後もしばらく動けませんでした。やがて、腹を押さえながら立ち上がりました。目の前がくらくなります。

すると、こんな声が聞こえてきました。

「やれやれ、まともに食らったのか？　しょうがないヤツだな」

白髪まじりの黒髪にひげ面の中年男が、道の反対側の柵にのんびりともたれかかりながら、フルートを見ていました。まだ昼間だというのに、火酒ひさけの小瓶を握りしめて赤い顔をしています。町の飲んだくれのゴリスです。

フルートがなにも言わずにいると、ゴリスは怪しい手つきで拳を繰り出す真似をしながら言い続けました。

「いいかフルート、こう、腹を殴られそうになったときにはな……腹の筋肉を固く締めて受け止めるんだ。そうしないと、胃袋が破裂することだってあるんだぞ」

フルートは鼻の頭にしわを寄せました。そんなことを言われても、と言いたそうな表情が浮かびます。

ゴリスは、いつ会っても酔っばらっていて、誰彼たれかれかまわず捕まえては戦い方や剣術の話をするのです。昔は名のある貴族に仕えていた剣士だったという噂うわさもありましたが、本当にゴリスが剣を使うところを見た人はいなかったたので、誰も噂を本気にはいませませんでした。

フルートが黙って立ち去ろうとすると、ゴリスがまた話しかけてきました。

「おまえ、どうしてジャックの拳こぶしを避けなかったんだ？」

フルートは足を止めました。

「だって……急だったから……」

と口ごもりながら答えると、ゴリスが笑いました。

「馬鹿め、俺の目をごまかせると思うのか……おまえは、ジャックの拳をよけられたんだよ。ただ、そうするとすぐ後ろにいるリサがと

ばつちりを食うから、よけずに、わざと体で受け止めたのさ」

フルートはとまどって「ゴリスを振り返りました。実はその通りだったのです。」

ゴリスは、へっと笑いました。

「まったくあきれたヤツだな。ま、リサが殴られそうになった時、とっさに自分の方にジャックの注意を引きつけたのは、なかなかだったが……。だが、そんなやり方じゃ、いくつ体があっても持たないぞ。俺の所に来い、フルート。俺がおまえにを戦い方を教えてやる」

けれども、フルートは首を横に振りしました。フルートは、とにかく戦いや喧嘩けんかといったものが大嫌いだったのです。

「ぼくのせいで誰かが怪我をしたり血を流したりするのは、絶対にいやだよ」

とたんに、ゴリスが声を上げて笑い出しました。

「そりゃ、しかたがないだろう！　戦えば怪我はする。ときには死ぬことだってあるさ」

そして、ゴリスはふいに、笑いをひっこめました。

「だがな、フルート……これだけは覚えておけ。本当の戦いつてのはな、人を倒したり殺したりすることじゃない。戦いつてのは、自分の命や大切な人たちを守るためにするものなんだ。それを忘れて、ただ倒した敵の数を数えて喜んでいるようなヤツは、いくら勲章くんしょうをもらって偉い称号を受けていたって、英雄でも勇者でもない。そいつはただの乱暴者なのさ」

フルートは、びっくりしてゴリスを見つめました。いつも酔っばらって、絡むように戦いの話をするゴリスが、いやに大まじめな顔をしています。

けれども、次の瞬間、ゴリスはまた、へっと笑って肩をすくめました。

「なあってな。おまえに言ったってわかるわけはないか……」
また、いつもののだらしない飲んだくれの顔に戻っています。

「ま、とにかく、戦い方を覚えなくなったら、いつでも俺んちに来い。
格安で教えてやるぞ……」

そう言いながら、ゴーリスはふらふらと千鳥足ちどりあしで離れていきました。
そのときです。

ざーっと雨が降り出すような音が響いたと思うと、空一面に鳥の大群が現れました。

空が真つ暗になるほどの数の鳥が、ギヤアギヤア甲高く鳴き叫びながら、頭上を北から南へ向かって飛び過ぎていきます。

町の人々は驚いて空を見上げました。ゴーリスとフルートもびつくりしてそれを見ました。今は夏の終わり。鳥が渡る季節ではありません。

皆が見守る中、鳥たちは南の空の彼方へ飛び去っていきました。後にはまた、よく晴れた青空が現れます。

「不吉だな……」

ゴーリスが眉をひそめてそうつぶやきました。フルートの胸にも、泡立つような不安がわき上がってきます。

フルートは鳥が飛んできた方角を眺めました。けれども、そちらの空もただ青く晴れ渡っているだけで、なんの凶兆も見あたりませんでした。

2 決心

学校から帰ってきたフルートは、家の前に何人も大人の人が集まっているのを見て、目を丸くしました。

フルートの家は町はずれに建っています。家のすぐ前はもう荒野で、その彼方には夏でも雪をいたたく山脈が見えます。街道から少し離れているので、用事がなければ人も通りかからないような場所なので……。

よく見ると、大人たちは家の中にも何人もいて、せわしく出入りしながら何かを話し合っているようでした。フルートは突然また不安になってきました。何かが起きたのに違いありません。

フルートは走り出しました。家の中にはお母さんがいたはずですが、お母さんに何かあったのでしょうか……。

その時、家の中からフルートがよく知っている人が出てきました。お父さんの仕事仲間のおじさんです。フルートはおじさんに飛びつきました。

「何かあったんですか!? お母さんがどうかしたの!？」

すると、おじさんは一瞬眉の間に深いしわを寄せて、どこかが痛むような顔でフルートを見ました。

「お母さんじゃないよ。君のお父さんだ……。落馬して、牛に踏まれたんだよ……」

そして、おじさんは口をぎゅっとゆがめました。

フルートは茫然ぼうぜんとしました。フルートのお父さんは牧童で、数人の仲間と一緒に牧場でたくさん牛を飼っています。口数はあまり多くないけれど、いろいろなることをよく知っている優しいお父さんです。乗馬も上手で、馬から落ちるなんてことはまず考えられないのに……。

すると、おじさんがまた言いました。

「さっき、空をものすごい数の鳥が飛んでいったらどう? あれに牛たちが驚いていつせいに走り出したんだ。お父さんはそれを止めよう

として、馬から振り落とされたんだよ……」

フルートは弾かれたようにおじさんから離れると、家に飛び込んでいきました。

家の中には、近所のおじさんやおばさんたちがたくさんいました。皆、フルートを見てなんととも言えない表情をします。

「フルート……お父さんが牛に踏まれて大怪我をしてね……」

「今、お医者様が手当てをしてくれているんだけど……」

おじさんおばさんたちの口ごもるような話し方が、お父さんの怪我のひどさを物語っていました。フルートは大急ぎで奥の部屋に駆け込んでいきました。

部屋は窓にカーテンが引かれて薄暗くなっていました。部屋中、葉の匂いでいっぱいです。

奥のベッドの上にお父さんが寝かされていました。頭も体も、たくさん白い包帯で巻かれています。苦しそうなうめき声が絶え間なく聞こえてきます。

その枕元には、フルートのお母さんが手で顔をおおって座り込んでいました。泣いているようです。お母さんと仲がよい近所のおばさんが、心配そうにそばにいました。

お医者様は、お父さんの牧場で一番リーダー格のおじさんを相手に話をしていました。

「……とにかく、ひどい状態だ。何十頭もの牛の蹄で踏みつけられて、体中の骨が折れている。おそらく内臓もめちゃくちゃだろう。だが、この町に魔法医はおらんからな。わしにできるだけの手当はしたのだが、正直、助かる見込みは……」

医者はそのままで言っ、首を横に振って見せました。リーダー格のおじさんは、何も言わずに、片手で目をおおってうつむいてしまいました。

フルートは震えながらお父さんのベッドに近づきました。

巻かれたばかりの包帯に、赤い血がにじみ出ています。包帯の隙間からのぞく顔には、赤黒いあざがいくつも見えていて、大きく腫れ上がったまぶたが片目をふさいでしまっています。うめき声の合間に苦しそうに息を吸いますが、それも切れ切れで、今にも止まってしまいうそでした。

フルートは真つ青な顔でベッドの柱を固く握りしめました。涙があふれそうになるのを、歯を食いしばってこらえます。

お父さんは重体です。この状態からお父さんを助けられるのは、お医者様の言うとおり、魔法医しかいないでしょう。でも、ここから馬で二日もかかる大きな町まで行かないと、魔法医はいないのです。呼びに行っても戻ってくるまでに丸四日かかります。それまでお父さんが持たないことは、見ただけで明らかでした。

どうしよう……とフルートは必死で考えました。

このままじゃ、お父さんが死んでしまう。誰かお父さんを助けられる人はいないんだろうか？ 怪我を治す特效薬はないんだろうか？

どうしよう、どうしよう。誰か、何か……。思いがぐるぐると駆けめぐりますが、何も手だてが思いつきません。不安が胸にせり上がってきて、息が苦しくなってきました。誰か助けて！ と大声で叫びたくなります。

すると、突然、さっきジャックたちに話した言い伝えが頭の中に浮かんできました。

『魔の森の主は人間を憎む。許しなく森に足を踏み入れた者は、魔法にとらわれて気が狂い、獣に八つ裂きにされ、闇の怪物に骨の髄までしゃぶり尽くされる。』

「ここまでではジャックたちにも語ったことです。でも、この言い伝えにはまだ続きがありました。」

『けれども、森の怪物たちに討ち勝って、泉のほとりから魔法の金の石を得たものは、金の石の勇者と呼ばれるだろう。金の石は癒しの石。どんな怪我でも病気でも、たちどころに治す魔法の力を持つ。』

フルートは、はっとしました。自分が思いついてしまったことにめまいさえ感じて、足ががくがく震え出します。

魔の森の恐ろしさは、シルの住人なら、誰もが十分に知っていました。そばに近寄るだけで禍々しい雰囲気伝わってきて、怖くて進めなくなるのです。ときたま、魔の森から抜け出した怪物が、シルの町に迷い込んでくることがありました。そんなとき、町の住人はありつたけの魔よけを家の中に置き、怪物が通り過ぎていくまで、ひたすら祈り続けるのでした。

でも……

フルートはベッドでうめき続けているお父さんを見ました。どんな怪我でも病気でも、たちどころに治すという魔法の石。お父さんを助けるには、それを取ってくるしか方法がないのです。

胸の内がすつと冷たくなっていき、すぐに熱いものがこみ上げてきました。

フルートは、唇をかみしめると、苦しそうにあえいでいるお父さんを見つめました。

お父さん、待っててね。ぼくがきつと助けてあげるからね……。

そう心の中で話しかけると、フルートはそつと部屋を抜け出していきます。

隣の居間にはたくさんの大人たちがいました。近所の人やお父さんの仕事仲間たちが、時々洩れ聞こえてくるうめき声に、沈痛な表情で

黙り込んでいます。

フルートは大人たちの間をすり抜けて、台所に入っていました。そこには誰もいませんでした。

フルートは、急いであたりを見回しました。魔の森には怪物がいっぱいいます。何か武器と防具になるものが必要でした。

居間にはお父さんが仕事で使うナイフや小刀がしまつてある戸棚があります。でも、それを取りに行けば、大人たちに「どうするつもりだ」と聞かれて、魔の森に行くことを止められてしまうでしょう。

フルートは少し考えてから、お母さんが使う料理用のナイフと、家で一番頑丈な金属製の鍋の蓋を取りました。鍋の蓋は、取っ手を持つと盾に似た格好になります。それから、フルートは上着のポケットに火打ち箱とランプ用の油の小瓶をねじ込むと、ナイフを布でくるんで腰のベルトに差し、鍋の蓋を片手に持って、こつそりと裏口から家の外に出ました。

家の裏には、お父さんの愛馬のブランがつかわれていました。お父さんは、ブランから振り落とされて大怪我をしたのです。そのことが分かっているのか、ブランはしょんぼりとたたずんでいました。

フルートは近づくと、ささやくように言いました。

「ブラン、ぼくを魔の森まで連れて行ってくれ。お父さんを助けるために、魔法の金の石を取ってくるんだ……！」

一分後、フルートは、馬の背にまたがって、魔の森目ざして全速力で荒野を駆けていました

3 魔の森

魔の森は、昼でも薄暗い場所でした。

町のまわりにはまばらに木が生える荒野が広がっているのに、そこだけは、まるで何かの結界のように、ぎっしりと木が生い茂っているのです。冬でも葉を落とさない木々は、奇妙な形にねじ曲がっていて、緑の巨人の集団のように見えました。

フルートが魔の森に近づくと、なんととも言えない不気味な雰囲気はどんどん強くなり、ブランの足取りが重くなってきました。フルートはそれを励ましながら前進しましたが、とうとうブランが立ち止まってしまったので、しかたなく降りて歩くことにしました。

そのあたりに馬をつなぐような木立はありません。

「いいかい、ブラン。ここで待っているんだよ。必ずお父さんに金の石を持って帰ってくるからね」

そう馬に言い聞かせると、フルートはひとりで森に向かいました。森に近づくと、ますます不気味な気配が強まります。フルートは進みながら、時々顔に吹き出した冷や汗をぬぐいました。体全体を押しとどめるような圧力が森から伝わってきます。それはまるで、魔の森が目に見えない巨大な手を伸ばして、フルートを押し返そうとしているようでした。

ところが、やがて森の一角から鋭い馬のいななきが聞こえてきました。イヒヒヒーン、グイヒヒヒヒーン……！

狂ったように馬が叫んでいます。それも、一頭や二頭ではありません。びっくりしたフルートは、思わず怖さも忘れて声の聞こえる方へ走り出しました。

森のいずれの木に六頭の馬がつかねがれていました。かわいそうに、どの馬も魔の森の気配におびえきっているのに、そこから逃げ出すことができなくて、半狂乱になって暴れていました。後足立ちになり、

蹄で地面や木を蹴りつけ、口から泡を吹きながら馬同士でかみつき合おうとしています。

「こ、こら！ やめろったら……！」
フルートはあわてて馬たちに声をかけましたが、馬は興奮していて、危険で近づくことさえできませんでした。その中に、ガキ大将のジャックの馬がいることに、フルートは気がつきました。

「まさか……」

フルートが森の中を見た時、近づいてくる馬の足音がして、甲高い少女の音が響きました。

「まあ、フルート！ あんた、こんなところでなにしているのよ!?」
おさげ髪のリサでした。スカートのままで馬にまたがり、片手に鞭を握りしめています。嫌がる馬を鞭で叱咤して、ここまでやってきたようでした。

フルートも目を丸くしてリサを見ました。

「リサこそ……何をしに来たの？」

「チムよ！」

トリサは怒ったように答えると、馬から飛び降りて、暴れている馬の群れを眺めました。

「やっぱりここに来たのね。チムったら、父さんの馬を勝手に連れ出していたのよ。ジャックたちの姿も町に見あたらないし。それで、ピョンと来てここに来てみたら、案の定だわ」

そして、リサはパニックになっている馬に向かって、ぴしりと鞭を鳴らして鋭く叫びました。

「どーっ！ 落ちつきなさい、おまえたち！」

とたんに、一頭の馬がぴたりと静かになりました。それがリサの家の馬でした。つられるように、他の馬たちも次々に暴れるのをやめます。リサの家はたくさん馬を飼っている大きな牧場で、リサ自身も馬の扱いはとても上手だったのです。

「よしよし。ひどかったわね、こんなところに連れてこられて、置いてきぼりにされて」

リサは馬たちの頭を優しく抱きながら、そう話しかけました。

フルートが言いました。

「ジャックたちは今日、魔の森に行くつもりだったんだね。ぼくたちには、わざと一日遅く行くように言っていたんだ」

どつりで、ずいぶんあっさりと言画を話したはずだ、とフルートはジャックの様子を思い出して納得していました。

すると、そんなフルートを見て、リサがうさくさそうな顔をしました。

「なによ、あんた……ジャックやチムたちと一緒に肝試しに来たわけじゃないの？ じゃ、なんでこんなところにいるのよ？」

フルートは思わず答えに詰まりました。お父さんのことを話すのは、相手がリサでも、なんだかためらわれる気がしたのです。

「なによ。何で黙っているわけ？」

トリサが眉をひそめてフルートを問いつめようとした時です。森の中から、つんざくような鳥の聲が上がりました。

ギギ、キキイイイー……！！！！

とたんに、森に悲鳴が響きました。子どもの声です。フルートとリサはびっくりして、そちらを見ました。

「たたた……助けてくれーっ！！！！」

二人の少年たちが森の中から飛び出してきました。ジャックの子分たちです。真っ青な顔で何かをわめきながら、我先に馬に駆け寄り、手綱をほどくと、馬の背にしがみつこうようにして逃げ出していきましました。すぐそばに立っているフルートやリサなど、見えてもいないようでした。

すると、その後を追って森からジャックと二人の少年が走ってきました。ジャックは猛烈に怒った顔をして、両腕を振り回してどなっていました。

「戻ってこい、腰抜けども！ ただの鳥の声じゃねえか！ 戻ってきやがれ！！！」

ジャックたちとフルートとリサが鉢合わせしました。

ジャックは目を丸くすると、たちまちばつの悪そうな表情になり、すぐにすくむような顔つきに変わりました。

「なんだよ、おまえたち。俺たちを連れ戻しに来たのか？」

リサは、くすりと笑うと、頭をそらして意地悪くいました。

「ええ、きつと森の中で怖くて震えてると思ってるね。案外近くにいたんじゃないの？」

ジャックは地団駄を踏んでわめきました。

「あんな腰抜け、もう俺の子分でもなんでもねえ！ 鳥が一声鳴いただけでおじけづきやがって。あんな奴らは足手まといなだけだ！」

それから、ジャックはフルートをじろりと見て言いました。

「ふん、お嬢ちゃんまでこんなところに来たのかよ。小便をもらさないうちに、とつとと家に帰れ」

「あら、フルートの方があんたの子分たちよりよっぽど度胸があるかもよ。鳥が鳴いたくらいじゃ逃げ出さなかったものね」

トリサが笑い、ふいに、笑うのをやめて真顔になりました。

「ちょっと……チムはどこよ？ あんたたちと一緒にじゃなかったの？」

ジャックの後ろにいるのは、背の高い二人の少年だけ。小柄なチムの姿は見あたりません。すると、ジャックが、ペツと地面に唾を吐きました。

「チムなんか、真っ先に臆病風に吹かれて、飛んで逃げやがったよ。今頃は泣きながら家に逃げ帰ってるさ」

「馬鹿言わないでよ！ チムが乗ってきた馬はここにいるのよ！」

とリサは鋭く叫びました。子どもたちは顔色を変えて森を見ました。「ぼくは途中でチムに会わなかったよ……」

とフルートが言いました。チムを見かけなかったのは、リサも同じでした。

「チム! どこよ、チム!」

リサが大声で呼びましたが、森からは何の返事もありません。リサは真っ青になりました。

「あの子、森の中で迷子になったんだわ! なんて馬鹿なの!」

「探そう」

即座にそう言って歩き出したのは、他でもないフルートでした。ためらうことなく木々の間をくぐって、森に入っていきます。

リサやジャックたちは一瞬ぼかんとそれを見送り、すぐに我に返りました。

「ちよ、ちよつとジャック、あのフルートが探しに行くつてのに、あなたはこんなところで震えてるわけ? チムはあんな子分よ。親分なら一緒に探さないよ」

とリサがきつい調子で言います。ジャックは息巻きながら答えました。

「もちろんだ。おい、行くぞ、ペック、ピリー。フルートより先にチムを見つけるんだ」

それを聞いて二人の子分は顔をしかめました。また魔の森の中に戻るの嫌だったのです。でも、ジャックがにらみつけると、肩をすくめて言いました。

「ちえ。あのチビ助、その辺の葉っぱの陰にでも隠れてるんじゃないのか?」

「フルートなんか気にすることないだろう。すぐに泣いて逃げ出すに決まってるのにさ……」

けれども、リサがフルートの後を追って森に入っていく、それに追

いつき追い越そうとするようにジャックが走っていくのを見ると、ペックとピリーもしかたなく後を追って森に入っていきます。

森の中は薄暗く、ひんやりと湿った空気がよどんでいます。

子どもたちはあちこちに向かってチムの名を呼びながら、探し始めました。

4 獣

フルートとリサ、ガキ大将のジャックと子分のペックとピリーは、チムを探して魔の森の中を歩き回りました。けれども、いくら呼んでもチムの返事はありません。リサの顔色はますます青くなりました。「あの子ったら……どこまで行ったのかしら?」

「森の奥に迷い込んだらどうね」

とフルートが木立の重なる向こうを透かして見ながら言いました。森の中は下生えのほとんどない、むき出しの地面が続いています。木があまりに多いので、遠くを見通すことはできません。

「ち、しょうがねえヤツだな。おい、ついてこい」

とジャックが先頭に立って森の奥へ歩き出しました。その手に抜き身の剣が握られているのを見て、フルートは目を丸くしました。古ぼけていますが、真正銘本物のロングソードです。赤い鞆まぶたがジャックのベルトにはさんであります。

すると、ジャックが、にやりとしました。

「ふふん、驚いたか? これは俺のじいさんの形見なんだ。じいさんは先のロムド国王の正規軍で隊長をしていたんだ。素晴すばらしい名刀なんだぞ」

「ふーん？ あたしにはただの古い剣にしか見えないけど」

とリサが遠慮もなく言うと、ジャックは、ふん、と鼻で笑いました。

「女なんかはこの剣の価値が分かってたまるか。俺のじいさんは、この剣で数々の戦場をくぐり抜けて、大勢の敵を倒してきたんだ。英雄だったんだぞ。俺は、その英雄の子孫なんだ」

陶醉するような表情がジャックの顔に浮かんでいました。英雄だった祖父と自分自身を重ね合わせているのでしょうか。その様子に、フルートはちょっと首をかしげました。いくら英雄の孫で名刀を持つていたって、ジャックが英雄というわけではないのですが、口に出してそれを言うことはしませんでした。

やがて、行く手の木陰で茂みがガサガサと音を立て始めました。

「チム!?」

リサが歓声を上げて駆け寄ろうとしたとたん、フルートが鋭い声を上げました。

「待つて！ みんな動かないで！」

茂みの中に、黒いものがちらりと見えたのです。全員が思わず立ちすくんだ時、茂みから、ぬっと一頭の獣が姿を現しました。熊でした。

フルートは、とっさにベルトにはさんだナイフを取り出しました。

お母さんが台所で使う料理用のナイフです。ジャックも祖父の形見の剣を構えました。

すると、熊がおもむろに後足で立ち上がりました。ぐんと熊の体がふくれあがって、大きくなったように見えます。とたんに、ピリーがヒーツと悲鳴を上げました。

「い、い、いやだあ！ 食い殺されちまうよー！」

ピリーはそう叫ぶなり、くるりと後ろを向いて全速力で逃げ出しました。

「あっ、この、ピリー……！！！」

怒って振り返ろうとしたジャックに、突然フルートが体でぶつかっていききました。二人がもつれ合って地面に倒れると、そのすぐわきに、熊が飛んできました。間一髪で熊をかわしたのです。

フルートは素早く体制を立て直すと、ナイフを構えたまま熊に向き合いました。熊はすぐ目と鼻の先です。

すると、少女の声が響きました。

「みんな、目をつぶって！！！」

リサが何か丸いものを地面に投げつけます。とたんに、強烈な光がほとばしり、あたりは一瞬真っ白に輝きました。

熊は閃光をまともにあびて目がくらみ、うなり声を上げると、向きを変えて森の奥へ逃げていきました。

光が消え、地面には乾いた粘土のかげらのようなものが残りました。フルートは驚いてリサを振り返りました。

「光玉だね……初めて見たよ」

「ずっと昔、うちに立ち寄って食料を買っていった旅の魔法使いが置いていったのよ。五つあったんだけど、兄さんたちが面白がって使っちゃって、これが最後のひとつだったの。とっときの武器にするつもりだったんだけど、早々に使っちゃったわね」

「ううん。おかげでみんな助かったよ」

とフルートが答えた時、ジャックたちが急にわめき出しました。

「目が……目が……！」

「目が全然見えねえ！ どうなってるんだ……！？」

リサがあきれたように二人を見下ろしました。

「ばっかねえ。まともに光玉を見たわけ？ 目をつぶれて言ったじゃないの」

「馬鹿野郎。いきなりそんなこと言われてできるか！」

目が見えないにもかかわらず、ジャックが言い返してきました。

「あら、フルートはちゃんと目をつぶってたわよ。あんたたちが鈍いんでしょよ。安心なさい。五分もすれば、また目が見えるようになってくるから」

そう言うてから、リサはちよつと考え込み、改めてフルートをまじまじと見ました。

「そういえば、あんた、ホントによく目を閉じたわね。あたしが光玉を持っていたなんて知らなかったのに。それに、さっき、あんたがジャックに体当たりして、熊から守ったように見えたんだけど……」

「馬鹿言え！ こいつにそんな勇気があるもんか！ 熊に驚いて飛びのいたら、俺にぶつかつたんだよ！」

とジャックがどなりました。目が見えない分、余計にいらいらしているようでした。リサも思わずうなずきました。

「そうね、フルートだもんね。あたしの勘違いだわ」
それを聞いて、フルートはそつと首をすくめました。本当は、リサが言っていたとおりだったのです。でも、それはわざわざ口に出して言うようなことでもないと思っていました。

やがて、ジャックたちの視力が戻ってきました。

「うー……目の前がチカチカしてるぞ。なんて武器だ」

ジャックは不機嫌にうなり、自分が逃げていった方向をにらんで、また地面に唾を吐きました。

「けつ、ピリーのヤツ、覚えてるよ。町に戻ったら、ただじゃおかねえからな」

それを聞いて、たったひとり残った子分のペックは青ざめた顔になりました。悲壮な表情が浮かびます。本当は彼も逃げ出したいのです。けれども、親分のジャックの手前、逃げるに逃げられなくなっているのです。

ジャックは立ち上がると、剣を持って歩き出しました。

「行くぞ、ペック。油断するなよ」

ペックが悲しげな表情でジャックについて行きます。

「さ、あたしたちも行くわよ」

トリサがフルートに言っつて、先に立って歩き出しました。フルートは料理用のナイフを握りしめたまま、あたりに気を配りながら、しんがりを歩いていきました。

魔の森は、奥へ行くほど濃く深くなっていきました。

5 怪物

森を奥に進むに連れて、なんとも言えない不気味な感じは、ますます強くなってきました。

何も見えません。何も聞こえません。けれども、得体の知れない気配が、子どもたちを押し包んでいるのです。子どもたちは一列になつて歩き続けていましたが、いつの間にかチムを呼ぶ声が小さくなり、おそろおそろあたりを見回すだけになっていました。時々、わけもなく、ぞおつと背筋が寒くなるような思いが走り抜けていきます。そのたびに子どもたちは立ち止まり、四方八方の気配をうかがいながら、顔に吹き出した冷や汗をぬぐいました。

「ホントに気味の悪いところ」

トリサが顔をしかめて言いました。

「なんだか、ずっと誰かに見られているような感じがしてるのよ。何かがすぐ後ろをついてきてきているみたいなの」

「やめろ！」

ジャックが乱暴にさえぎりました。その顔にはおびえるような色が浮かんでいます。けれども、さすがのリサもそれに言い返すことはしませんでした。リサ自身が、ジャックに劣らずおびえた顔をしていたからです。

すると、突然、真ん中を歩いてきたペックが崩れるように地面に膝をつき、げえげえと吐き始めました。子どもたちは驚いてそれを見ました。

ペックは胃の中のものを何度も吐くと、よろめきながら立ち上がりました。その顔色は土気色で、死人のようでした。

「呪いだ！」

とペックが叫びました。

「森の主が、俺たちに呪いの魔法をかけたんだよ……！俺たちは死ぬんだ！気が狂って、死んじまうんだ……！！」

「なに血迷ってやがる！」

とジャックが叱りつけました。

「怖い怖いと思ってるから、胃袋がでんぐりがえっちまったんだろうが。正気に返るように一発食らわせてやる」

ジャックが拳をかざしながら近寄ると、ペックは突然ものすごい力でそれを突き飛ばしました。

「もういやだ！！死ぬんならジャックだけにしろ！俺は死にたくない！！」

ペックはそう叫ぶと、金切り声を上げ、いきなり今来た方向へ駆け出しました。後ろにいたりリサやフルートも突き飛ばして、まっしぐらに走って逃げていきます。子どもたちは地面にしりもちをついたまま、声も出せずにそれを見送りました。今まで張りつめていたものが突然切れて、一緒に逃げ出したい気持ちに駆られます。

フルートも体中をがたがた震わせて座りこんでいました。止めよう

と思っても震えは止まりません。怖くて怖くて、今にも息が詰まりそうです。そのまま地面を這ってでも、森の出口を目ざしたくなります。だけ……

フルートは自分の唇を血がにじむほどかみしめました。

だめです。今、家に逃げ帰るわけにはいけません。

フルートは自分の膝をつかんで立ち上がりました。恐怖を払い飛ばすように、大声で叫びます。

「チム！！チム、どこだい……！？」

その声に、ジャックとリサも、はっと我に返りました。自分たちが何のためにここにいるのかを思い出したのです。

「ちくしょう！」

ジャックが悪態をつきながら立ち上がりました。祖父の形見の剣を握り直して、フルートと一緒に呼び始めます。

「チム！どこにいやがる！？」

リサも立ち上がって弟を呼びました。

「チム！返事をしなさい、チム……！！」

すると。

森の奥から、かすかに声が聞こえてきました。

子どもたちは、またはつとして、耳を澄ましました。それは男の子の泣き声でした。リサが歓声を上げました。

「チムよ！間違いない。チムの声よ！」

そして、リサは声のする方へ走り出し、先に立って低い茂みをくぐり抜けました。フルートとジャックもそれを追います。

とたんに、リサの悲鳴が響き渡りました。

フルートとジャックは思わず顔を見合わせ、あわてて茂みを抜けました。

目の前にリサが立ちすくんでいました。

その先には木がまばらになった小さな空き地があり、空き地の向こう側に見上げるような生き物がいました。長い八本の足、短い毛が生えた丸い体、体にへばりつくような小さな頭、八つの複眼……。それは、全長三メートル以上もある大グモでした。

フルートたちは茫然としました。とても子どもが戦えるような敵ではありません。

クモが子どもたちに近づいてきました。ベキベキと足下の茂みを踏み砕く音が響きます。それと一緒に、弱々しい声が聞こえてきました。

「助けて、姉ちゃん……助けて……」

子どもたちはぎよつとして声の方を見ました。クモの足下に、いびつな白い糸の塊かたまりが転がっていました。まるで巨大な白いイモムシのように見えますが、糸のまばらなところから、ゆがんだ唇と片目がのぞいています。

「チム!!!」

リサが叫びました。チムは大グモにつかまり、糸でぐるぐる巻きにされていたのです。

クモが八つの目で子どもたちを見ました。

「危ない!!」

子どもたちが飛びのくと、シートという音と共に、その場所に白い糸が飛んできました。このクモは糸を口から吐き出すのです。粘りけのある糸の塊が地面にへばりつきます。

リサが、かつと頬に血を上らせました。帯にはさんでいた馬用の鞭を抜くと、それをつならせながら、クモに向かって飛び出していきました。

「チムを離しなさいよ! この怪物!!」

「リサ!」

「無茶だ!」

ジャックとフルートは思わず声を上げました。

その目の前でクモが白い糸を吐き、リサの体を絡め取りました。リサは金切り声を上げました。

「きゃああ、いやああ……!!!」

狂ったように身もだえしますが、クモの糸は丈夫でまったく切れません。そこへクモがさらに大量の糸を吐き出しました。リサとクモの間に糸の束がぴんと張り渡されます。

シ・シ・シ……

大グモは空気の漏れるような音をたてながら、二本の前足を使って糸をたぐり寄せ始めました。リサの体がぐつとクモに引き寄せられます。

「いやーっ……!!!」

リサはまた悲鳴を上げると、ふいに崩れ落ちるように倒れました。

……気を失ったのです。

「リサ!」

立ちすくんでいたフルートとジャックが我に返りました。クモはリサの体をどんどん引き寄せていきます。

フルートはナイフを手に飛び出していきました。ジャックもそれに続きます。

すると、クモは突然リサにつながつた糸を切り、新しい糸の束を少年たちに向かって吐き出してきました。フルートとジャックは、あわてて左右に飛び退き、かるうじてそれをかわしました。

「近づけねえ!」

とジャックがわめきました。

フルートは唇をかんで、また前に飛び出しました。それを狙って、また糸が吐き出されてきます。飛んでかわすと、また糸の攻撃。本当に近づけません。

大きく下がって体勢を立て直そうとした時、フルートの足が小石で滑りました。フルートは仰向けになり、勢いよく地面に倒れました。

「フルート！」

ジャックのあせった声が響きます。

フルートは、とっさに両手を前につきだして、飛んでくる糸を防ぐうとしました。

ところが。

クモは何もしてきません。ただ、フルートたちをじっと見ているだけです。

「……？」

フルートは目を丸くしながら体を起こしました。しりもちをつきながら、じりじりと後ずさりしますが、やはりクモは襲いかかってきません。フルートは、ふいに、あることに気がつきました。

「ジャック」

とフルートは言いました。

「ぼくが前に出る。その間にリサを助けてやって」

「え？ お、おい……？」

ジャックが言われている意味を理解できずにいるうちに、フルートは立ち上がり、クモに向かって飛び出していきます。クモが糸を吐き出してきます。それを横にかわすと、また糸が飛んできます。ところが、フルートが後ろに下がったとたん、クモは突然攻撃をやめたのです。何もせずに、ただフルートを見ています。

「やっぱりだ……」

とフルートはつぶやきました。クモは前に進んでくる者だけを攻撃してくるのです。そういえば熊もそうでした。熊は大声を上げて逃げていく者に襲いかかると言われているのに、あの熊は逃げていくビリーのことは追いかけてよともしなかったのです。

「森の奥に行かせない番人なのか……」

とフルートはまたつぶやくと、ナイフと、盾代わりの鍋のふたを握

り直しました。それならば、戦いようがあるかもしれません。

ちらりと後ろを振り返ると、ジャックが剣でリサの体から糸を切っているのが見えました。さすがに英雄の孫と自慢するくらいのことはあるようです。決して逃げ出そうとはしません。

フルートはクモに向かってまた飛び出していきました。飛んでくる糸をかわしながら、少しずつジャックとリサからクモを引き離そうとします。すると、空き地の外れに突き当たってしまいました。フルートは大急ぎで後ろに飛び下がりました。とたんに、クモが攻撃を止めます。

フルートは、激しくあえぎながら体勢を整えました。後ろに下がりがさえすればクモにやられる心配はありませんが、それではらちがあきません。それに、クモのすぐ近くにはチムが転がったままです。

ジャックがリサの体を糸の束の中から引きずり出しているのが見えました。リサはまだ気を失ったままです。

フルートはまた前に飛び出しました。クモの糸が飛んできます。それをフルートは鍋のふたで受け止めました。クモとフルートの間に糸が張り渡されます。

とたんに、フルートは鍋のふたを手放しました。ふたは勢いよくクモに向かって飛んでいき、小さな丸い頭を直撃しました。

「シュー……！」

クモが思わずたじろいだ瞬間、フルートは思い切り前に飛び出して、ナイフでクモの前足に切りつけました。小枝を切り払うように、前足がすっぱり切れて宙を飛びます。

「シ・シ・シュー……！！」

クモが悲鳴を上げました。あわてて身を引こうとした瞬間を狙って、フルートは足をもう一本切り払いました。緑の体液が飛び散り、クモ

が大きくのけぞります。その隙に、フルートはまた大きく後ろに下がりました。

大グモはそのままフルートとにらみ合っていました。やがて、くると後ろを向くと、茂みを踏みしだきながら、森の奥へ姿を消していきました。逃げていったのです。

フルートは、突然体中の力が抜けて、へなへなとその場に座りこんでしまいました。体中汗びっしょりになっています。

空き地の片隅には鍋のふたが転がっていました。クモが地面に叩きつけたので、大きくひしゃげてしまっています。それを見たとなん、フルートは改めて、ぞっとしました。こんなふうにつぶれていたのは、フルートの方だったのかもしれないのです。

すると、目の前にめつとジャックが現れました。相変わらず意地の悪い表情をしています。いつもとは違う目の色でフルートを見ています。

「おまえ……ホントにフルートだよな」

とジャックがうさくさそうに言いました。

「フルートにしちゃ、やけに勇敢じゃねえか。どうしたんだ、いったい」

けれども、その時、泣き声が聞こえてきました。

「助けて……早く助けてよ、ジャック……」

ぐるぐる巻きのチムでした。ジャックは我に返った顔になると、すぐに駆け寄って、剣でチムの糸を切り始めました。フルートも急いで行って、一緒にナイフで糸を切り、糸の束を引きむしってやりました。

「た、助かったあ……」

チムが泣きべそ顔で糸の中からはい出してきました。まだ体のあちこちに糸はへばりついていますが、怪我はありません。

「ちっ、迷惑かけやがって」

ジャックが怒ったように言ったので、チムは泣き顔のまま小さくなりました。

リサは空き地の隅に倒れていました。まだ気を失っていますが、こちらに怪我はないようです。

フルートは、ほっとすると、改めて森の奥を見ました。森は薄暗く静まりかえっています。大グモはもう遠くへ逃げてしまったようですが、前進すれば、また何かが現れて行く手をふさぐことでしょう……。

フルートは大きく息を吸うと、立ち上がって歩き出しました。

「おい、どこへ行く？」

とジャックが声をかけてきます。フルートは前を向いたまま答えました。

「森の奥の泉に。ぼくはどうしても金の石を取ってこなくちゃいけないんだ」

ベッドの上で苦しんでいるお父さんの姿が思い浮かびました。フルートはきゅつと唇をかむと、森の奥目ざして進んでいきました。

「おい、待てフルート。待てたら……！」

ジャックが半ば怒り、半ばあきれた声で呼びましたが、フルートは立ち止まりませんでした。

「あの野郎……」

ジャックは歯ぎしりをして立ち上がりました。祖父の剣を握りしめます。目を丸くして驚いているチムに、ジャックは早口に言いました。

「俺はこのまま進む。おまえはリサが目を覚ましたら一緒に帰れ」

「えええっ!？」

チムが悲鳴を上げました。魔の森の中に自分たちだけ残されるのが恐ろしかったのです。とたんにジャックの怒声が飛びました。

「リサはおまえを捜してここまで来たんだ! おまえも男なら根性見せる! いいか、ひとりで逃げるんじゃないぞ。そんなことをしたら

後で気を失うまでぶん殴るからな！」

チムは真っ青になって、こくこくと何度もうなずくと、リサのかたわらにすっ飛んでいって座りこみました。ぶるぶる震えています、自分だけで逃げ出す気配はありませんでした。

「けっ」

ジャックは身をひるがえしました。フルートの姿は木立の間に隠れて見えなくなっています。

「あんな腰抜けに後れをとってたまるか」

とジャックはつぶやくと、フルートの後を追って走り出しました。

6 白い顔

奥に進むに連れて、森はますます暗くなっていきました。

地面には藪やぶや下生したはえがほとんどないので歩きやすいのですが、大きな木の根が地上に出ている、思いがけず岩が顔を出している、つまずいて転びそうになることもたびたびです。そして、何も言えない、見張られているような感覚は、もう間違いようがないほどはつきりと感じられていました。

「森の主が見てる……………」

とフルートは心の中でつぶやくと、顔に吹き出す汗をぬぐいました。森の中は涼しいのに、汗が流れて止まりません。冷や汗でした。

すぐ目の前をジャックが歩いていました。剣を握りしめ、肩を怒らせて進んでいきます。ジャックも全身冷や汗でびっしょりになっていました。絶対にフルートに先を譲ろうとはしないのです。

二人は黙々と森の中を進んでいきました。あたりはしんと静まりか

えっついて、鳥の声さえ聞こえません。異様な静けさです。

また敵が現れそうだな…………とフルートは考えて、自分たちの装備を改めて眺めました。装備と言っても、大したことはありません。ジャックは古いロングソードを、フルートは料理用のナイフを持っているだけです。次の敵にも、これだけの武器で戦えるのでしょうか？

ふと、フルートは苦笑いをしました。

どうしてこんなことをしているんだろう？ と考えたのです。魔の森の恐ろしさは十分に知っていたし、ジャックたちにも「殺されてしまつよ」と警告していたのに、他でもない自分自身が、そのジャックと一緒にこうして魔の森を歩いているのです。それを思うと、なんだか不安と悲しさがごちゃ混ぜな気持ちになって、涙が出てきそうになりました。

魔の森の主は人間を憎んでいる。森に足を踏み入れた人間は、魔法にとらわれて気が狂い、獣や怪物に八つ裂きにされる…………

魔の森の言い伝えがまた頭の中によみがえってきます。

森の主はフルートたちを見えています。じつと見つめて、不敬な侵入者に天罰を下そうとしているのです

なんて馬鹿なことをしているんだろう、とフルートは考えました。

森の主の魔法にフルートたちの武器がかなうはずはありません。熊と大グモは運良く追い払えましたが、次の敵にもそんなにうまい具合にいくでしょうか。

あらゆる怪我や病気を癒し、真の勇者の証になる、魔法の金の石。それを求めて大勢の大人たちが森に入っていました。鎧よろい兜かぶとに身を包んだ戦士、岩のような筋肉をした力自慢、旅の魔法使い…………けれど、どんなに強そうな大人たちでも、誰ひとりとして魔の森から金の石を持ち帰ることはできなかったのです。屈強の戦士たちにもできなかったことを、たった十一歳のフルートにできるといえるのでしょうか

か？ 何の能力もない、弱くて小さな子どもに……。

フルートは、いつの間にか足を止めていました。

お父さんの枕元で泣いていたお母さんの姿を思い出します。お父さんだけでなく、フルートまでが死んでしまったら、お母さんはどんなに嘆き悲しむことでしょう……。

ぼくは何をしているんだろう？ とフルートは自分自身に尋ねました。

こんなちつばけなナイフひとつで、何ができると思っていたんだろう？ 森の主は、ぼくのことを一撃で倒してしまうのに。魔法の石なんて、取ってこられるはずがないのに……。

帰れ！ 帰れ！ とどこからか声が聞こえるような気がしました。

風もないのに木の葉がざわめき、木々の枝や幹がぎしみ始めます。

まるで、森中の木が、フルートたちに向かって口々にわめいているようです。 森から出て行け！ と。

フルートの胸がぐうっと苦しくなってきました。言いようのない恐怖に、心臓が爆発しそうなくらい脈打っています。足が勝手に回れ右をして、出口目ざして走り出しそうです。

帰ろう、とフルートは震えながら考えました。

今ならまだ間に合う。家に帰るんだ。そして、お父さんとお母さんのそばにいてあげよう。今のぼくに本当にできることは、それくらいなんだから。

せめて、お父さんのそばに……
きつとお父さんだつて分かってくれるさ………

フルートの脳裏に、ひとつの光景が浮かびました。

ベッドのかたわらでフルートはお父さんの手を握って立っています。お父さんはもう苦しんではいません。静かな顔で横たわっています。

す。抜けるような死者の顔色、呼吸をしていない胸、冷たくなっているお父さんの手……

そんなものを、フルートはありありと思い浮かべました。

そして、その枕元で、フルートは黙ってお父さんを見つめ続けているのです。

ただ、見つめ続けているのです………。

ふいに、フルートはかたわらの木を思い切り殴りつけました。じいんと手に痛みが走り、拳に血がにじみまみす。

「い、や、だ……！ いやだ……絶対に嫌だ！！」

恐怖で声も出なくなっていた咽をふり絞って、フルートは叫びました。

何もしないまま、お父さんが死んでいくのを見ていただけなんて、フルートは絶対に嫌でした。たとえどんなに困難でも、どんなに無謀でも、ほんの少しでも可能性があるのなら、フルートはあきらめてしまいたくありませんでした。

帰れ、帰れ、帰れ……森が言い続けています。フルートは、それに向かつて叫び返しました。

「黙れ！ ぼくは絶対にお父さんを助けるんだ！！」

とたんに、森はざわめくのをやめました。

そして、それと同時にフルートの体が、ふっと軽くなりました。人の心に恐怖を呼び起こし、逃げ出したい気持ちにさせる魔法に、いつの間にか捉えられていたのです。フルートは魔法を振り切ったのです。

フルートは汗びつしよりになりながら、ぜいぜいと息をつきました。まるで何百メートルも全力疾走してきたように、全身が疲れ切っています。

ます。

ふと気がつくとかたわらでジャックも汗だくであえいでいました。その顔色は土気色つちけいろです。ジャックも同じ恐怖の魔法につかまって、フルートの声でようやく呪縛をふりほどくことができたのでした。

フルートは顔中の汗を袖そででぬぐうと、きつと顔を上げました。どんなに自分に力がなくても、どんな敵が現れても、なんとしても森の奥までたどり着いて、金の石を手に入れるつもりでした。

すると、ジャックが、ひいつと声を上げて行く手を指さしました。行く手に幻のようなものが現れ始めたのです。

もやもやと白い霧のようなものが寄り集まったと思うと、巨大な顔に変わります。男とも女とも分からない、面のように無表情な白い顔でした。

驚いて立ちつくすフルートたちに向かって、顔が、かつと口を開けてどなりました。

「わしの森に入り込んで騒がせているのは誰だ!? 命が惜しければ、さつさと立ち去れ!!」

森中を揺るがすような声が響き渡ります。大きく開いた口の中には、ずらりと鋭い牙が見えました。

「ひ、ひええーっ……!!」

ジャックが悲鳴を上げて、へたへたとその場に座りこんでしまいました。腰が抜けたのです。

フルートは、ナイフを固く握りしめて恐怖と戦いながら、白い顔に向かって叫び返しました。

「お願いがあるんです、森の主! どうか、ぼくに魔法の石を貸してください! お父さんが死にそうなんです!!」

白い顔が、すうっと目を細めました。冷やかな笑いが顔一面に広がります。

「ならぬ!!」

顔がどなりました。

ならぬ、ならぬ、ならぬ……帰れ、帰れ、帰れ……声が森中に山彦やまひこのように響き渡ります。

フルートは唇をかみました。

「それじゃ……力づくでもらっていきます!!」

そう叫ぶなり、フルートは飛び出して行って、ナイフで白い顔に切りつけました。

バシユツ!

風を切るような音がして、一瞬のうちに、顔が消え去りました。後には暗い森が広がっています……。

子どもたちを捉えていた恐怖が、再び潮しほが引くように遠のいていきました。

フルートは、顔中にまた吹き出していた冷や汗をぬぐいました。そのまま、森の奥を見つめます。

ジャックがのろのろと立ち上がり始めました。足腰に力が戻ってきたようです。

「フルート……」

と叫びかけて、ジャックは急に、ぎゅつと口をゆがめました。悔しそうな表情が浮かびます。

ジャックは足音荒くフルートの前に出ると、乱暴な口調で言いました。

「あ、あんな化け物は剣じゃ切れねえ! だから、俺は手を出さなかつたんだ! 今度出てきた敵は、必ず俺がこの剣の餌食えしきにしてやるからな! おまえは手を出すなよ!!」

フルートは目を丸くしましたが、ジャックが先に立ってとどどん歩

いていくので、あわてて後を追いかけてました。

「待ってよ、ジャック。ひとりで行くのは危険だよ」

「うるせえ！ 腰抜けは黙ってついてくりやいいんだよ！」

腰抜け。これほど、今のフルートに的はずれな悪口もありませんでした。そんなことはおかまいなく、ジャックは奥へと進んでいきました。

森はいっそう暗く、深くなっていきました……。

7 蛇^{へび}

森の中を三十分近くも歩き続けた頃、フルートが、ふと足を止めました。

右手の森の奥から、何かの気配が伝わってきます。こちらに向かつて近づいてくるようです。

「ジャック」

フルートは先に行くジャックを呼び止めました。

ジャックがすぐに立ち止まって耳を澄まします。

ズズツ、ズズツと何か重いものを引きずるような音が、森の奥から聞こえていました。フルートはナイフを抜いて構えました。ジャックも剣を構えます。音がどんどん迫ってきます。

ところが、音は途中で突然向きを変えると、子どもたちがいる場所から遠ざかりはじめました。ズズズツ……と何かを引きずるような音が小さくなっていきます。

フルートがほっとしたとたん、突然ジャックが大声を上げました。

「どこに行く、怪物！ 俺たちはここだぞ——！」

「ジャック！」

フルートはびつくりしてジャックに飛びつき、口をふさごうとしました。けれども、ジャックはそれを跳ね飛ばすと、剣を振りかざしてどなりました。

「うるせえ、腰抜け！ 俺を誰だと思ってやがる！ 先のロムド国王に仕えた英雄の孫だぞ！ 森の怪物くらい、俺が叩き切つて——！」

突然、森の中から巨大な蛇が現れました。

頭だけでも、さっきのクモ以上の大きさがあります。真つ黒な鱗^{うろこ}におおわれた体は、森の中に長々と伸びていて、どこまで続いているのか見えません。頭の大きさから見て、十メートルはゆうに下らないでしょう。

「で、でけえ……！」

ジャックは震えながらつぶやきましたが、その声に自分で我に返ると、いきなりきつと蛇をにらみつけました。

「ちぎしよう！ 大蛇がなんだ！ その首を切り落とすてやる！」

そうわめきながら、剣を手に走り出します。

「危ない！」

フルートはあわてて足下から小石を拾うと、蛇に向かって思い切り投げつけました。石が蛇の目元に当たって、一瞬蛇がひるみます。

その隙に、ジャックは蛇に切りかかっていきました。鱗におおわれた皮膚が裂け、血しぶきが飛びます。首を切り落とすまでは行きませんでした。首に傷を負わせたのでした。

「へっ、見たか、名刀の切れ味！ 俺がいつも手入れしているんだからな」

ジャックは得意そうに言いましたが、蛇が地響きを立てて身をくねらせたので、あわてて大きく飛びのきました。

「ジャック、一度下がって！」

と言いながら、フルートが前に飛び出してきました。手にナイフを握りしめています。

蛇がシャーッと怒った声を上げて鎌首をもたげました。前に立つフルートではなく、まっすぐジャックに向かって攻撃していきます。フルートは目を見張りました。今までの敵と攻撃パターンが違います。

ジャックは大あわてで木陰に飛び込み、蛇の攻撃をかわそうとしました。ところが、蛇は木を押し倒して襲いかかってきます。ベキベキッと木がへし折れる音が響きます。

「う、うわーっ！！！！」

すぐ目の前に蛇の頭が迫ってきたので、ジャックは無我夢中で剣を振り回しました。闇雲に振った剣が、倒れた木の太い枝に当たります。

パキン……！！

堅い音を響かせて、剣の刃が中程からまっぴたつに折れました。

ジャックは呆然とそれを見つめ、それから、真っ青になりました。

「け、剣が……じいさんの剣が……！！」

折れた剣を握りしめたまま、へなへなとその場に座りこんでしまいます。そこへ蛇が襲いかかってきました。

「ジャック……！！」

フルートはジャックの前に飛び出すと、ナイフを思い切り前に突き出しました。ぐさりとナイフが刺さる手応えがして、フルートとジャックは後ろに跳ね飛ばされます。

ナイフは蛇の鼻先に突き刺さっていました。蛇が頭を振り上げ、ナイフを抜こうと猛烈に暴れ出します。巨大な体があたりかまわすのたうち回り、木をへし折り、岩を飛ばします。

フルートは急いで立ち上がると、ジャックに言いました。

「今のうちだ！ 逃げよう！」

けれども、ジャックは折れた剣を抱いたまま、へたり込んで呆けて

います。フルートはジャックの手を引いて無理やり立たせました。

「早く、ジャック！ 戻るんだ……！！」

フルートとジャックは、今来た道を走って戻りはじめました。今までの敵なら、これで追いかけてこなくなるはずですが。けれども、この蛇はやはり違いました。ひとしきり木をへし折って大暴れすると、ズルズルと音を立てながら、フルートたちの後を追ってきたのです。

「く、来る！ 蛇が来る……！！！！」

ジャックは悲鳴を上げると、いきなりフルートの手をふりほどいて、まっしぐらに逃げ出しました。目をいっぱいに見開き、髪を振り乱して、完全に錯乱状態です。祖父の形見の剣が折れた時、ジャックの中の何かも一緒に壊れてしまったようでした。

「ジャック……！！」

フルートが思わず呼び止めようとした時、ジャックが悲鳴を上げて姿を消しました。

フルートがびっくりして駆けつけると、薄暗がりの中に崖がありました。張り出した崖の上の土を踏み崩して、ジャックはまっさかさま下に落ちたのです。

フルートはあわてて崖の下をのぞき込みました。

五メートルほど下に、沢に沿った小さな谷間があり、深緑色の苔が一面に生えています。ジャックはその苔の上に倒れていました。

「大丈夫……？」

とフルートが声をかけると、ジャックが身動きをして、たちまち大きな悲鳴を上げました。

「足が痛くて動かねえ！ 骨が折れてる……！！」

それを聞いて、フルートは目を見張りました。足が折れたのでは、ジャックはもう崖を上がってこなくても、逃げることもできません。蛇はまもなくフルートたちを追ってくるでしょう。このままでは、

ジャックがつかまってしまいました……。

崖の上に、ジャックの剣が落ちていました。刀身は半ばで折れていますが、短い剣と思えば使いようもあります。フルートは、それを取り上げて言いました。

「ジャック、そのまま、見つからないように隠れていて。蛇はほくのほうにおびき寄せるから」

とたんに、ジャックが振り絞るような悲鳴を上げました。フルートはあわてて言いました。

「静かにして。蛇に聞かれたら見つかったらちゃうよ」

ところがジャックの悲鳴は止まりません。ひとり残されると思ったとたん、完全にパニックに陥ってしまったのです。自分が叫んでいることさえ気がついていないようでした。

フルートはあせり、ちよっとの間迷ってから、思い切って折れた剣をジャックに向かって投げました。

「ほら、君のおじいちゃんの剣だよ。これを持って隠れていて」

とたんに、ジャックの叫び声がぴたりと止まりました。見ると、ジャックはさすがのように剣を抱きしめていました。すすり泣きの声は聞こえませんが、正気に返ったようです。やがて、ジャックは体を引きずるようにしながら、近くの岩の陰に向かって動き始めました。

フルートは立ち上がると、急いで崖から離れました。蛇が追いついてきて、崖の下のジャックに気づいては大変だからです。

小走りに森の中を移動しながら、フルートは蛇を自分のほうに引きつけるにはどうしたらいいだろう、と考えました。上着のポケットをまさぐると、家から持ち出してきた火打ち箱と油の小瓶が手に触れました。

「そうだ」

フルートは小さくつぶやくと、地面に落ちていた手頃な枝を拾い上げました。そこにナイフをくるんできた布をぐるぐると巻き付けると、小瓶の中のランプ油を布にたっぷりふりかけ、火打ち石で火をつけました。松明を作ったのです。

「蛇は目が悪いんだ、って父さんが言ってた」

とフルートはつぶやきました。

「その代わり、温度にとっても敏感で、熱いものを狙って攻撃してくるんだ、って。きつと、この火を狙ってくるはずだ……」

森の奥から木々がへし折れる音が聞こえてきました。引きずるような蛇の音が近づいてきます。子どもたちに傷を負わされて怒り狂っているのでしょうか。すごい速さで移動しています。

フルートは松明を握りしめたまま、急いで崖とは反対の方向へ走り出しました

8 泉

案の定、大蛇は松明の後を追いかけてきました。

崖の下に隠れるジャックには気づかないまま通り過ぎ、ひたすらフルートの後を追ってきます。

フルートは必死で走り続けました。重なり合った木々の幹や枝の後ろに回り、太い木と木の間をすり抜けて、なんとか蛇をまこうとします。

けれども、蛇は障害物をなぎ倒しながら突き進んできました。

ベキベキベキ……バキバキ……
蛇が木をへし折る音が森に響きます。どんどん後ろに迫ってきます。

「このままじゃ追いつかれる……」

フルートは歯を食いしばって走りながら考えました。もう武器は何もありません。ナイフも、剣も。あるのは火のついた松明一本だけです。

バキキツ!!!

ひととき大きな音を立てて、蛇の頭が背後に現れました。

ナイフはどこかでふるい落としてきたようです。鼻面から血を流しながら、フルートをにらみつけます。

フルートは、とつさに松明を横に放り投げました。その火めがけて、蛇がかみつきました。一瞬のうちに松明が粉々になります。目にもとまらない素早さでした。蛇の攻撃は、人間が見極めることができないほど速いのです。

「だめだ、かわせない……」

フルートは思わず覚悟を決めました。

蛇が向き直ってきます。まわりより温度が高いもの……人間のフルートを、獲物と狙い定めたのです。

フルートは、堅く目をつぶりました。

すると、突然フルートの体が後ろからすごい力で引っ張られました。

誰かの大きな手でつかまれて、ぐいっと引き寄せられます。

目の前で蛇が空をかむ気配がしました。歯がかみ鳴らされる音が聞こえます。

そして

あたりは静かになりました。

小鳥のさえずりが聞こえます。

木の葉のざわめきと、水が浅瀬を流れていくせせらぎの音も聞こえます。

フルートの体が温かい空気に包まれます……

フルートは、そつと目を開けてみました。

そこは、今まで立っていた、暗い森の中ではありませんでした。

フルートのまわりには木が一本もなく、代わりに、足下には丈の短い柔らかな草が一面に生い茂っています。青と白の星のような花が、そこここで咲き乱れています。たった今まで向き合っていた大蛇は、どこにも見あたりません……

フルートは、びつくりしてあたりを見回しました。

そこは、森の中にできた丸い空き地でした。森は黒い壁のようにまわりで枝を広げていますが、頭上には青空が広がり、太陽の光が空き地の中に降り注いでいます。もう夕方に近い日差しでしたが、暗い森の中にいたフルートの目には、まぶしくしみるようでした。

そして、空き地の真ん中には、金色の石に囲まれて、美しい泉がありました。

フルートは、ぽかんと口を開けました。ここが、目ざす場所なのだと気がついたのです。

いつの間に、こんな場所に来ていたのでしょうか？

けれども、いくら思い出そうとしても、何が起こったのかフルートには分かりませんでした。

フルートは、おそるおそる泉に近づいてみました。

泉の底は、美しい金の砂でおおわれています。その中心から、澄んだ水が後から後からわき出してきて、泉の一方から小川になって森の

中に流れ出ていきます。小川のほとりでは草が揺れ、トンボや蝶が飛びまわっています。すきとおった青や銀の羽根が、宝石のように日の光に輝きます。

泉のまわりには数え切れないほどの金の石が積み重ねられ、泉を縁取っていました。自然が作り上げた縁飾りです。大きな石、小さな石、いろいろな形の金の石が、太陽の光にキラキラと輝きながら無造作に転がっています。大きなものは、フルートの頭ほどの大きさもあります。これひとつでも持ち帰れば、一生楽に暮らせる大金持ちになれるそうです。

けれども、フルートは困った顔になりました。それが魔法の金の石なのか、見分けがつかなかったのです。

魔法の石には、なにか特徴があるのでしょうか？ それとも、ここにある金の石は、どれも魔法の力を持っているのでしょうか？ 金の石は、大きさや形は違っていても、どれも同じように輝いていて、何も違いはないように見えました。

「うーん……？」

フルートは首をひねりながら、足下からひとつ石を拾い上げてみました。直径三センチほどの、ほんの小石でした。

とたんに、声が響き渡りました。

「何故、その石を選んだ？」

フルートはぎよつとしてあたりを見回しました。誰もいません。けれども、その声に聞き覚えがありました。森で出会った、森の主の声です。

泉の真ん中が、急にこぼこぼと大きく泡立ち始めました。まるで大きな水の塊が吹き出してくるように、泉の上に水の柱が

そりたち、それが人の姿に変わります。輝くように白い髪とひげの老人です。髪もひげも背丈より長く伸びて、泉の水の中に見えなくなっています。光の加減で金色にも銀色にも青にも見える、不思議な色合いの長い衣を身につけていて、深い青い目で、じつとフルートを見つめていました。

その老人を見たとなん、フルートは、はっとして、思わず深々と頭を下げました。

「何故、わしに頭を下げる？」

と老人が尋ねました。それはやはり、森の主の声でした。

フルートは顔を上げて、老人をまっすぐに見ました。老人はとて多年をとっていましたが、穏やかで敵かな顔をしていて、少しも怖い感じはしませんでした。

「だって、あなたはこの泉と森の王様だからです。勝手に森に入り込んですみませんでした」

とフルートは精一杯でいねいな口調で答えました。

「ふむ、泉と森の王様か。なかなかうまいことを言う」

と老人は白いひげをなでながら笑うと、泉の水の上をゆっくり近づいてきました。

「いかにも、わしはこの泉の主じゃ。泉の長老と呼ばれておる。もう二千年以上もこの泉と森を守ってきたが、ここまで人間がたどり着いてきたのは、実に百年ぶりのことじゃ。しかも、子どもとはのう。思わずこの扉を開けてしもうたぞ……」

それを聞いて、フルートは、またはっとしました。

「じゃ、ぼくをさつき蛇から助けてくださったのは、あなただったんですね！？」

「いかにも……。勇氣ある子どもが蛇に食われるのは忍びなかったのな」

と泉の長老が答えました。

フルートは、もう一度、長老に深く頭を下げました。

泉の長老は、水の上を歩いて、フルートのすぐ目の前で立ち止まりました。骨張った指でフルートが持つ金の小石をさして、尋ねます。

「その石じゃ。おまえは何故、それを選んだのじゃ？」

「え？」

フルートはとまどいました。ただ足下に落ちていたので、何気なく手に取っただけなのですが……。

正直にそう話すと、泉の長老は、面白そうに声を上げて笑い出しました。

「これはこれは。本当に何も知らずに選んでおったのか。いや、石がおまえを選んだのじゃな」

石が選ぶ？ フルートが言われている意味を理解できずにいると、長老が言いました。

「フルートよ。この泉に金は数え切れないほどあるが、魔法の力を持つ金の石は、たったひとつしかない。それが、今おまえが手にしている石じゃ。魔法の石は、自分で持ち主を選ぶ。おまえは、金の石に主人に選ばれたのじゃよ」

フルートはびっくりして、目をぱちくりさせました。

「あ、あの、長老……ぼくはお父さんの怪我を治す間だけ、この石をお借りできれば、それでいいんですけど……」

言いながら、フルートは、長老が自分の名前を知っていたことに気がつきました。フルートはまだ、名前を名乗っていなかったはずなのに……。でも、魔の森の泉の精ならば、それくらい知っているのは当然のような気もしました。

「その石はもう、おまえのものじゃ」

と泉の長老が静かに言いました。

「石がおまえを選んだのじゃからな。その石を持つ者は、金の石の勇者と呼ばれる。それがおまえの役目なのじゃ、フルートよ」

フルートは、ますますびっくり仰天しました。勇者……役目？ いったいなんの？

すると、長老が言いました。

「それはいずれ明らかになってくる。凶兆の鳥は予言通り空を渡っていった。世界のあちこちで、邪悪なものがうごめきだしてある。じきに、敵が姿を現してくることじゃろう」

長老のことばは謎めいていましたが、フルートは、胸がどきりとするのを感じていました。世界に邪悪なものが現れる、と聞いたとたん、一刻も早く何とかしなくてはいけないような、いたたまらない気持ちになりました。

「あせるでない、フルートよ」

と長老が言いました。

「時期が来れば、必ずおまえは呼ばれる。それまでは、おまえができることをするのじゃ。まずは……そうじゃな、あの蛇を倒さねばならんだろう。あれは、わしの森の生き物ではない。敵が送り込んできた邪悪なものじゃ。奴らはわしを目障りに思っておるからの。それ、わしの結界を破ってきおった」

不意に、森の一角でベキベキツと激しい音がして、枝を折りながら大蛇が現れました。黒い鎌首を上げて、シャアアーツと威嚇してきます。

思わず身構えたフルートのかたわらで、泉の長老が片手をかざして声を上げました。

「はあっ！」

とたんに、大蛇がぴたりと止まりました。凍り付いたように、その場から動かなくなります。長老の魔法です。

「その金の石を蛇に向けるのじゃ」

と長老が言いました。フルートは、言われたとおり、急いで金の石を蛇に向けました。

すると、金の石が強く輝き、金の光を放ちました。まるで、真夏の太陽の光を集めたような、強烈な光です。蛇の黒い身体を金色に染めます。

ジャー……！！！！

蛇が苦しげな声を上げて、のたうち始めました。その巨大な体が、光の中でみるみるうちに溶け始めます。まるで、蠟細工の蛇を火に投げ込んだように、どろどろに崩れていき……

もの一分とたたないうちに、大蛇は跡形もなく消えてなくなってしまうました。

金の石の光が吸い込まれるようにおさまっていきます。

びっくりしているフルートに、泉の長老は言いました。

「心配することはない。金の石は守りの石じゃ。邪悪なものは打ち消しても、人間にはなんの害も及ぼさぬ。ただ怪我や病を癒すだけじゃ」

それを聞いて、フルートは、大怪我をしているお父さんや、足を折って動けないでいるジャックのことを思い出しました。急いで二人のところに戻らなくてはなりません。それを話すと、長老はうなずきました。

「ジャックは、この泉から流れ出る川のほとりで待つておる。この川に沿って進むがよい。森はもう、おまえたちを邪魔することはない」

フルートは、思わずまた、深々と長老に頭を下げてしまいました。

ところが、フルートが川に沿って森に戻っていきこうとすると、長老が急に言いました。

「金の石は、そのままでは持ちにくかるう……それ」

長老が長い指をちよつと振ると、金の石がフルートの手の中できらきらと輝きだしました。蛇を倒したときとは、また違った輝き方です。その輝きがおさまったとき、フルートの手の中には、金の石をはめ込んだペンダントが現れていました。草と花の模様を刻んだ金の縁飾りが金の石を取り巻き、その一端に長い金の鎖がついています。

「首から下げているがよい。石はいつも、おまえたちを守ってくれるぞ」

と長老が言いました。

フルートは言われたとおりペンダントを首から下げると、また長老に一礼をしました。

「本当に、何から何までありがとうございます」

「いづれまた会おう」

長老はそう言い残すと、水が崩れていくように、泉の中に消えていきました。後には、明るく輝く泉と空き地が残るだけです。

フルートは、ペンダントの金の石を手の中に握りしめると、小川に沿って森へ歩いていきました……。

9 金の石

泉から流れ出る川に沿ってフルートが歩いていくと、ほんの五分ほどでジャックが落ちた崖の下に着きました。深緑の苔におおわれた岩の陰に、ジャックが片足を抱えて倒れていました。その顔は激痛と恐怖で真っ青ですが、それでも、必死に歯を食いしばってこらえています。その手は折れた祖父の剣を強く握りしめていました。

フルートは急いで駆け寄って声をかけました。

「ジャック、大丈夫？」

ジャックが目を開けて、信じられないようにフルートを見ました。

「おまえ……生きていたのか……」

ジャックはてっきりフルートが蛇に食われたものと思い、次は自分の番だとおびえていたのです。フルートは、にっこりして見せました。

「もう大丈夫だよ。蛇はいなくなっちゃったからね」

それから、フルートはジャックの足を調べてみました。右の足首が変な方向にねじ曲がって、ひどく腫れ上がっています。確かに骨が折れているようです。

「ちよつと待ってね」

とフルートは言うのと、首から下げていた金の石のペンダントを外しました。少し考えてから、石をジャックの右足に当ててみます。

石が触れた瞬間、ジャックは悲鳴を上げて足を引っ込めようとしたが、みるみるうちにその顔つきが変わっていきましました。信じられないように目を見張り、自分の右足と金の石のペンダントを見つめます。ねじ曲がった足首が、くくつとまっすぐにになり、あつという間に腫れが引いていったからです。

たちまち、ジャックの足は元通りになっていました。

「い、痛くねえぞ！ もう何でもねえ！」

ジャックが驚いて声を上げ、立ち上がって飛び跳ねました。本当に、もう全然痛みません。

「良かった」

フルートは、ほつとして笑顔になりました。

ジャックはフルートが持つペンダントをまじまじと見つめました。

「おい、フルート……まさか、それって……」

フルートは一瞬なんと答えようかと迷いました。けれども、ジャックは癒しの力を目の前で見ているのです。石の正体をこまかせるはず

がありませんでした。

フルートはうなずいて答えました。

「うん。魔法の金の石だよ。泉の長老からもらったんだ」

長い間 フルートが居心地悪くなるくらい長い間、ジャックは何も言いませんでした。それから、ようやくまた口を開くと、ひどく悔しそうな声でこう言いました。

「そうだよな……。おまえは本当はものすごく勇敢なんだもんな。ただ、それを見せてなかっただけで……。ちつ、意気地なしのふりなんかしやがって！」

フルートは目をぱちくりさせました。弱いふりをしているつもりはなかったのです。

「ぼ、ぼくは……」

と言いかけると、ジャックは突然祖父の剣を目の前にかざしました。半ばで折れた刃を歯ぎりしりながら眺めます。

「それに比べて、俺はこのざまかよ……。！ 肝心な時に役にたたなくなりやがって。何が名刀だ！ こんなもん！」

ジャックは剣をかたわらの岩に叩きつけようとしてました。

フルートはあわててその手に飛びつきました。

「だめだよ！ そんなことしちゃだめだ！！」

フルートは必死で言いました。

「その剣はおじいちゃんの形見なんだろう？ 一番怖いときに勇気くれたんだらう？ だったら、やっぱり大切にしなくちゃ……！」

ジャックは、あきれたようにフルートを見つめました。

それから、へつ、と鼻で笑うと、フルートをふりほどきました。

「ったく……ホントに、馬鹿がつくほどお人好しだな、おまえは。なんでこんな剣のことまで心配するんだよ。やっぱり、おまえと俺は馬が合わねえぜ」

それから、ジャックは折れた剣を赤い鞘に戻すと、肩をすくめて歩き出しました。

「あーあ、もうやめたやめた！ おまえなんかと本気で張り合って、馬鹿みたいだったぜ！」

投げやりになんか言いながら、すたすと、先に立って沢を下り始めます。

フルートは目を丸くして、その後を追いました。

すると、沢の川下から、馬の蹄ひづめの音が聞こえてきました。小川の水をばしやばしやと跳ね飛ばしながら、こちらに向かつて走ってきました。

まもなく川の曲がり角から姿を現したのは、酔いどれのゴーリスとジャックの父親でした。二人とも馬に乗っています。

「フルート！」

「ジャック！」

ゴーリスとジャックの父親が同時に声を上げました。

「親父！」

ジャックも歓声を上げました。

二人の大人が駆け寄ってきて、馬から飛び降りました。

「二人とも無事だったか……。逃げ帰ってきたビリーとペックから話を聞いて、あわてて探しに来たんだぞ」

とゴーリスが言いました。いつもだらしなく酔っている彼が、見たこともないほど真剣な顔をしています。その腰に剣が下がっているのに、フルートは気がつきませんでした。手入れがよく行き届いた大剣です。

「森の入り口の方にはチムとリサがいるんだよ」

とフルートは言いました。二人が無事かどうか、急に心配になったのです。すると、ゴーリスがうなずきました。

「あの二人なら大丈夫だ。リサたちの父親も一緒に来ていたんだ。おまえたちより先に見つかったから、今頃はもう家に帰り着いているだろう」

それから、ゴーリスはあたりを見回し、改めて子どもたちを見ました。

「しかし、よくここまで来られたな。俺だって、こんな奥深くまで来たことはなかったぞ」

まるで何度もこの森に来たことがあるような言い方です。フルートは、おや、とゴーリスを見つめ直しました。

その時、ジャックの父親が猛烈な勢いでどなりはじめました。

「そこに座れ、馬鹿者どもが！！ 魔の森をなんだと思っている！ この罰当たりめが！！」

雷かみなりがとどろくような大声です。さすがのジャックも低姿勢になりました。

「ごめんよ、親父……ごめんつたら……」

けれども、ジャックの父親はかんかん腹をたてていて、すぐには怒りがおさまりそうにありませんでした。

すると、ジャックが言いました。

「ま、待つてくれ、親父。フルートは関係ねえんだ。全部俺とペックたちで計画したんだよ。それに、フルートは急いで自分の家に帰らなくちゃならねえんだ。親父さんの具合が悪いんだからさ……」

フルートは、思わずジャックを見ました。ジャックがこんなことを言うてくれるなんて、信じられませんでした。

すると、ジャックは、わざと渋い顔をして見せながら言いました。

「いいから、早くいけよ。俺はもう大丈夫だ。親父さんのところに早くそれを持って行ってやれ」

それ、とジャックが言っているのは、魔法の金の石のことでした。

フルートはうなずくと、ゴリスに飛びつきました。

「お願いだよ、ゴリス。ぼくを家まで連れて行って！」

「な、なんだ。何がいったいどうしたんだ？」

ゴリスは、フルートの父親が怪我をしたことを知らないように、目を白黒させていましたが、それでも言われるままフルートを自分の馬に乗せると、森の外めざして走り始めました。

「急げよーっ！」

後ろからジャックの声が追いかけてきました。

ゴリスがそれを聞いて不思議そうにフルートに言いました。

「ジャックのやつ、いつもと態度が違うな。おまえたち、森で何があったんだ？」

けれども、フルートにはそれに答えている余裕はありませんでした。

家へ。一刻も早くお父さんのもとへ。

フルートの頭の中は、そのことだけでいっぱいになっていました。

10 奇跡

フルートを乗せて、ゴリスは馬を走らせました。

沢に沿って駆けていくと、森は彼らの前で次々に枝を引き、道を開けていきます。その様子に、ゴリスが言いました。

「不思議だな……森が俺たちを通して。こんなことは今まで一度だつてなかったのに。おまえたちを探しに来たときにも、ひとりで森がこの道を開いて、おまえたちの所まで案内したような感じだったんだぞ」

フルートは、泉の長老の顔を思い浮かべました。きっと、長老が道を作ってくれているのに違いありませんでした。

やがて、馬は森を抜け、荒野に飛び出しました。

荒野はもう夕暮れでした。赤く染まった空の下になだらかな丘が続き、その向こうにフルートたちの町が見えます。

「急いで！」

とフルートは言いました。

けれども、ゴリスが言いました。

「そんなに焦るなよ。こいつは年寄り馬だ。二人も乗せて森の中を早駆けさせたんだから、少し休ませないと。それに、もう日暮れだ。馬が窪地くぼちに足を取られたら大変だぞ」

フルートは唇をかみました。……今日はもう、何度こうして唇をかみしめたことでしょうか。

すると、荒野の中に、ぽつんと白い馬の姿が見えました。フルートを乗せてきたブランです。

「ブランが待ってた！」

フルートは喜んで声を上げると、白馬に駆け寄りました。

「やれやれ。おまえの家の馬がいたか」

ゴリスが、ほつとしたように言いました。これでお役ご免めん、と安心しているようでした。

フルートはブランに飛び乗ると、両足で馬の腹を蹴けって言いました。

「走れ、ブラン！ 家まで突っ走るんだ！！」

ブランは一声いなくなると、全速力で町に向かって駆け出しました。

「おいおい」

ゴリスがあきれたようにそれを見送りました。

「いったいどうしたって言うんだ。競争でもしているのか？」

フルートを乗せた馬は、みるみるうちに遠ざかっていきます。ゴリスは、ふーむ、とうなって、ひげだらけの顎をなでました。

「……しようがない。最後までつきあってやるか」
そうつぶやくと、ゴリスはフルートの後を追って、これまた全速力で馬を走らせ始めました。

フルートが町はずれの自分の家に着いたとき、日はとつぷりと暮れ、空には星がまたたき始めていました。フルートは、玄関のドアを開けて家に飛び込みました。

家の中は真つ暗で、部屋の中には誰もいませんでした。さつきまであんなに大勢集まっていた大人たちが、みんないなくなっています。

フルートの心臓が早鳴り始めました。フルートは間に合わなかったのでしょうか？ お父さんはもう、死んでしまったのでしょうか……？

すると、奥の部屋のドアが開いて、医者が顔を出しました。

「誰だね？」

ドアの隙間から灯りがもれて、フルートを照らし出します。すると、医者は歓声を上げました。

「おお、フルートか。良かった！ おまえが魔の森に行ったという知らせが入ったんで、みんなおまえを捜しに行ったんだぞ。やれやれ、とんでもない誤報だったな」

フルートはそれには答えず、今にも息が止まりそうなくらいどきどきしながら、奥の部屋に近づいていきました。

「先生……お父さんは……？」

医者は、何とも言えない表情でフルートを見つめました。

「今はまだ生きています。だが、今夜一晩もたないだろう……。お父さ

んのそばに行つて、話しかけてあげなさい。今ならまだ聞こえるかもしれん」

そこへ、フルートの後を追って、ゴリスが入ってきました。薬の匂いが充満した暗い部屋に眉をひそめ、医者に向かって尋ねます。

「何があつたんだ……？」

医者が、ゴリスに低い声で話を始めます。

フルートは、それを後ろに聞きながら、急いで奥の部屋に入っていました。

ランプの光の中に、お父さんが横たわっていました。フルートが家を出たときと同じように、体中に包帯を巻かれてベッドに寝ています。けれども、その口からはもう、うめき声は出ていませんでした。ただ、浅くて早い呼吸が、今にも止まりそうになりながら続いているだけです……。

お父さんの枕元にお母さんひとりがひざまづき、お父さんの手を握りしめていました。お父さんの顔を見つめ続けるお母さんの瞳から、涙が後から後からあふれていました。

フルートは、大きく息を吸い込むと、そっとベッドに近づいていきました。お父さんの枕元に立つて、声をかけます。

「お父さん……」

お父さんの返事はありませんでした。

フルートは大急ぎで首から金の石のペンダントを外すと、それをお父さんの胸の上に置きました。

「フルート……？」

お母さんが、泣きぬれた目を上げて、不思議そうに息子を見ました。

すると、突然、お父さんが大きなためき声を上げました。

お母さんとフルートは、びっくりして飛び上がりました。

お父さんの体が二度三度と大きくのけぞります。その息づかいが、急にはつきり規則正しくなくなっていくのが、そばにいるだけで分かりました。包帯の隙間からのぞく傷やあざが、みるみるうちに消えていきます。

「あなた……!?!」

お母さんが信じられないようにお父さんを見つめました。フルートも、お父さんの腫れ上がった顔がたちまちもとに戻っていくのを、息を詰めて見守っていました。

お父さんが目を開けました。フルートそっくりの青い目が、妻と息子を見上げます。

「ハンナ……フルート」

お父さんは、はつきりとそう言いました。

お母さんは悲鳴を上げると、そのまま、声を上げて泣き崩れてしまいました。嬉し泣きです。

その泣き声を聞きつけて、医者とゴリスが部屋に入ってきました。沈痛な表情をしています。フルートのお父さんが、とうとう亡くなったのだと思っただのです。

ところが、お父さんがベッドの上に起きあがったので、二人はびっくり仰天しました。

お父さんは、包帯だらけの自分を見回して、不思議そうに言いました。

「私はいつたいていどうしたんだ？ 何があっただんだ？」

医者が震えながら近づいてきて、大急ぎでお父さんから包帯をほどいていきました。お父さんは、体中どこにもかすり傷ひとつ負っていませんでした。

「信じられん！ 全身の骨が折れていたのに！ 内臓も何もかも、め

ちゃくちゃになつていたはずなのに……！ 奇跡だ！」

医者が天を振り仰いで叫びました。

お父さんは、きよとんと、不思議そうな顔をしていました……

11 星空

「ふう……」

フルートは、裏口から家を抜け出すと、中庭の草の上にごろりと寝転がりました。張りつめていた気持ちが一気にゆるんで、体中から力が抜けていきます。その右手の中には、金の石のペンダントがありました。

家の窓から、カーテンごしに光がもれています。お母さんの嬉しそうな泣き笑いの声と、医者興奮した声が聞こえてきます。医者は何度も「奇跡だ！」と繰り返していました。

すると、家の中から誰かが出てきました。ゴリスです。

ゴリスは、フルートの隣に腰を下ろすと、静かに言いました。

「お父さんが助かって、良かったな」

フルートは、黙ってうなずきました。何度も、もうだめかと思うようなことの連続でしたが、結果が良ければ何もかも良かったような気がしました。

中庭を夜風が吹き抜けていきます。ひんやりと心地よい、湿った風です。

草の陰から、虫の音がすかすかに聞こえてきます。頭上には、満天の星空が広がっています。フルートたちは、しばらくその中に静かに横たわったり、座ったりしていました。

やがて、ゴリスがまた口を開きました。

「フルート、おまえ、魔法の金の石を持ってっているんだろ？」

フルートは思わずゴリスの顔を見ました。魔の森からずっと、ゴリスはすっかりしらふで、見たこともないほどすっかりした顔つきをしていましたが、このときの彼は、いっそう真剣な表情をしているように見えました。

「うん」

とフルートは正直に答えると、起きあがって、手の中のペンダントをゴリスに見せました。

「これ……泉の長老にもらったんだ」

ゴリスは、しばらく黙って金の石のペンダントを見つめていましたが、やがて夜空を見上げると、ふーっと長いため息をつきました。

「ゴリス？」

フルートがとまどっている、ゴリスが言いました。

「まったく。金の石の勇者が、こんな子どもだったとはな……。想像もしていなかったぞ」

苦笑いするような声でした。

フルートがますます訳がわからずにいると、ゴリスは突然立ち上がって自分の腰の剣を抜き、剣をフルートの目の前に置いてひざまずきました。騎士が自分の主君に忠誠を誓うときのやり方です。

フルートがびっくりしていると、ゴリスはフルートに深く一礼してから、まじめな顔で言いました。

「占い通り勇者が現れたら、こうしようと思っていたのさ。俺のけじめだ。気にするな」

「占い……？」

フルートが目を丸くすると、ゴリスは今までとまるで違った口調

で話し出しました。

「フルート、よく聞け。大事な話だ……。今から十年も前のことになる。俺は、今でこそ酔いどれのゴリスなんて呼ばれているが、本当は、ある偉い方にお仕えする騎士だった。ところが、ある時、城の占い師がこんな占いをした。ロムドを含む世界中の国々に、やがて危険が迫ってくる。それはこの世界を破滅に導くほどの大きな闇で、誰もそれに対抗することはできない。しかし、世界が絶望に包まれた時、魔の森から金の石の勇者が現れて仲間と共に闇に立ち向かい、この世界を危険から救うだろう……。とな。俺のご主君は、その占いを信じて、金の石の勇者を迎えるために、俺を魔の森に一番近いこのシルの町に遣わしたんだ」

そこまで話して、ゴリスは遠い目になりました。

「十年は長かったぞ……。いくら待っても、森から金の石の勇者は現れない。何度足を運んでも、森は俺を追い払うばかりだ。しまいには、あれは俺を城から追い出すための陰謀だったんじゃないかと思うようになった。ご主君の命令に背くわけにはいかないから、城には戻れない。酒でも飲まなければ、とてもやっていられなかった……」

フルートは、金の石のペンダントとゴリスを交互に見比べました。何かを言わなければいけないような気がしましたが、なんとやっているのかわかりませんでした。

すると、そんなフルートの表情を見て、ゴリスが急に笑い出しました。

「だが、まあ、おまえは勇者と呼ばれるにはまだまだだな！ 剣の使い方も知らない、ひよっこだ。今、俺はやっと自分の使命を知ったぞ。その剣を取れ、フルート。俺がおまえに剣術を教えてやる。それが、俺の役目だ」

「剣を？」

フルートはびっくりして聞き返しました。自分が剣を持って戦う人間になるとは、全然想像していなかったからです。

すると、ゴーリスがにやりと笑いました。「人に怪我をさせるから戦うのはいやだ。か？金の石の勇者は、とんだ平和主義者らしいな」

フルートはゴーリスを見つめました。すると、突然、町でゴーリスが言っていたことが頭の中によみがえってきました。本当の戦いってのは、人を倒したり殺したりすることじゃない。戦いってのは、自分の命や大切な人たちを守るためにするものなんだ……と。

フルートは黙って考え込み、やがて静かに口を開きました。

「ぼくは……ずっと不思議だったんです。癒しの魔法が使える金の石が、どうして勇者の証になるんだろう、って。癒しの力と戦う勇者では、全然正反対の役目のはずなのに、って。でも……ぼくは、なんだか分かったような気がします」

ゴーリスが、それは？と目で尋ねてきました。

「泉の長老が言っていました。金の石は守りの石なんだ、って。金の石の勇者もそれと同じなんだと思うんです。みんなを守るために戦う人間なんです。守ることと癒すことは、見た目は違っていても、きつと同じことなんじゃないのかな……」

「おお、これはまた、ずいぶん難しいことを考えたな」

とゴーリスは笑い、手を伸ばしてフルートの頭をなでました。

「だが、俺もその通りだと思うぞ。勇者というのは、敵をばたばた切り倒して賞賛される人間のことでじゃない。弱い者たちを守るために戦うのが、本物の勇者なんだ。そして、そのためには、やっぱり勇者は戦い方を学ばなければならぬさ」

フルートはうなずくと、金のペンダントを首に下げて立ち上がりました。ゴーリスは片膝をついたまま、黙ってフルートを見上げています。

フルートは地面から剣を取り上げると、ずしりと重いそれを、ゴーリスに向かって差し出しました。

「ぼくに剣を教えてください。ぼくは強くなりたい。……みんなを守るくらいに、強く」

フルートは、はつきりした声でそう言いました。

「よし、よく言った。それでこそ、金の石の勇者だ！」

とゴーリスは顔を崩して笑うと、フルートから剣を受け取って言いました。

「明日からさっそく特訓だ。言っておくが、俺の授業は厳しいぞ。金の石の勇者だからと言って手加減はせんから、覚悟しておけよ」

「よろしくお願いします」

とフルートは頭を下げました。

夜空には一面に星がまたたいています。

それを見ながら、フルートは泉の長老のことばを思い出していました。

『時期が来れば、必ずおまえは呼ばれる。それまでは、おまえができることをするのじゃ……』

はい、とフルートは心の中で答えました。

そのときがいつ来るのかは分からないけれど、とにかく、自分にできる限りのことをしていよう。それがきつと、何かにつながっていくに違いないから。

そんなことを考えながら、フルートは星空を見上げていました。

すると、星が二つ、続けざまに流れていきました。

大きな星と小さな星が、長い光の尾を引きながら、北の山脈のほうへと消えていきます。

その後には、ただ静けさだけが残りました。

虫の音が夜の中にいつまでも続いています……。

『勇者フルートの冒険・始まりの物語 ～魔法の金の石～』

2011年12月23日 Ver.4.01

作品の感想をお聞かせください。

ley@nifty.com 朝倉玲



サイト「勇者フルートの冒険」

<http://asakuratosho.sets.ne.jp/tosyo/flute-index.htm>

素材提供「STAR DUST」

<http://lunar.littlestar.jp/stardust/index.html>